

西谷啓治著作集

第16卷



創文社版

〔西谷啓治著作集第16卷〕

第Ⅱ期 第1回配本

一九九〇年六月一〇日 第一刷印刷
一九九〇年六月一五日 第一刷發行

定價 三六〇五圓
（本體三五〇〇圓）

著 者 西 谷 啓 治

發 行 者 久 保 井 理 津 男

印 刷 者 中 内 康 兒

發 行 所 株 式 會 社 創 文 社

本 社 102 東京 都千代田區一番町一七一三
假事務所 112 東京 都文京區開口一四四一七

電 話 〇三二三五四三六一
振 替 東京二九二四七二

晚印刷・鈴木製本

ISBN4-423-19716-2

Printed in Japan

目次

第一部

現代の問題と宗教

——人間疎外をめぐって

.....

三

人間回復と宗教

.....

四

現代の虚無と信仰

.....

五

第二部

現代人と宗教

.....

六

宗教と歴史

.....

七

日本人の宗教心の問題

.....

八

日本における伝統的宗教意識

.....

九

第三部

今日における神祕主義研究の意義……………三七

現代における宗教の役割……………三〇

教團・教學・布教

——その意義と在り方……………三三

教育と宗教……………三六

後記

第一部

現代の問題と宗教

——人間疎外をめぐる——

第一講

「現代の問題と宗教」といふ題は、非常に大まかな題なのであまり立ち入ったお話はできないと思ひますが、そこでの基本的な問題はだいたい三つに分けられます。(一)人間の問題、(二)世界の問題、(三)神の問題、昔から哲學ではだいたいかういふことになつてゐます。ここでもそれらの問題をめぐつて考へてみたいと思ひます。

神の問題といふのは、神とか佛とかさういふ名前のついてゐるものに關する問題といふことです。神佛といふ場合、さういふふうなものはあるのかといふことが言はれるわけですが、ないならないで神佛といふものはないのだといふこと自身が一つの根本的な問題だといふことです。人間や、世界といふ問題にとつて、つまり、人間觀、あるいは世界觀といふ事柄にとつて、それが一番基本的な問題なのです。神佛といふもののあるなしといふことは、ただそれだけの問題ではなく、人間や世界を問題にする場合に基本的な問題だといふことです。要するに、さういふ意味で、名前は何であれ神佛といふやうなものが問題になるといふことが言へるわけです。

現代といふ時代は、一般的に見ますと、神佛といふやうなものが非常に影が薄くなつてゐる時代といつていいと思ひます。影が薄くなつてゐるといふことは、それがリアルな意味をもつたものとして、本當のリアリティー

をもつたものとして、人間とか世界とかといふ事柄に結びついて感じられない。極端に言へば、神は死んだといふことです。神が死んだとは一體どういふことかといふと、それは神佛といふものが、リアリティーをもつて臨んでくることなくつた、我々にリアルに感じられなくなつたといふことで、しかもそれは現代の一番根本の問題であり、現代といふ時代の一つの特徴であるといふことができます。さういふふうな意味で、神佛といふものが現代の大きな問題だといふことができると思ひます。

さて、神・世界・人間、この三つのことを問題にするといふことですが、先づ人間といふ場合には、これは單に人間觀——人間をどう見るか——といふことだけに盡きないで、根本は人間が自分自身をどう見てゐるかといふことです。自分が自分をどう見てゐるかといふことが人間觀といふことの根本です。人間が自分自身をどう受け取つてゐるかといふことが、人間が生きてゆくその生活の上で一番基本的な問題だといつていいと思ひます。

それは、我々の生活してゐるその一番根底に人間觀といふものがあるといふことだと思ひます。その場合に、ふつう人間といふ言葉を聞けば、人間といふものがだいたいわかつたやうな氣がする。自分も人間で、他にも人間が大勢ゐて、その邊にゴロゴロしてゐる、人間といへば誰でもみんなわかつてゐる。何かあたりまへなものといふた感じがあるわけです。しかし、それでは「人間とは何か」と改めて問ひ直すと、いろんな答へが出てくる。何かわかつたやうでわからない。しかし、さらに多くの場合はそこまでもいかなくて、いはば「人間とは何か」といふやうなことがはつきり問題にならない形で生きてゐる。そして、人間といふものはだいたいわかつたといふふうなことで生活してゐる。だからさういふ場合は、何か無意識的に、その人その人なりの人間觀といふやうなものが、非常に漠然とした形でどこか根本にある。漠然とした形といふのは、つきつめてゆけばわからなくなるといふ形でさういふことがあるといふことです。各々、人間といふものはそんなものだといふ漠然とした感じで、

つまり、理論化されない、概念化されない形で人間観をもつてゐるといふことでせう。現代の問題としては、さういふふうなことが非常に多いといふことです。今までの時代に比べて、「人間とは何か」といふやうなことを問題にすることが非常に少なくなつてゐるといふことが言へるのではないかと思ひます。

簡単に言ふと、我々は普通、自分のやつてゐることとか考へてゐることが、人間としてどうだといふところまで問題が届かないうちに、いろんなことをやつたり、考へたりしてゐることが多いのではないかと思ひます。昔でも勿論さうなのですが、ひよつとしたら昔の方が現代より、もつと人間といふものについて考へるといふことが生活の中に入つてゐたのではないかと思ひます。それとともに、これは後の問題になりますが、今日では他面において人間についてのいろいろな、例へば廣い意味での學問的見解といったものは、昔よりずつとはつきりしてきたと言へます。社會科學とか自然科學といふやうな角度から人間を問題にするのは、新聞とか雑誌とか教科書等を通して入つてくるのですが、その中にも人間観といふものは澤山書かれてゐます。しかし、私がここで人間といふことを問題にする場合には、さういふふうにはば外から人間とは何かといふふうに見るといふ立場だけでなく、各々が自分自身の中で、「人間とは何か」といふ問題を出すといふことです。自分がどういふ人間として自分を見てゐるか、あるいは解釋してゐるかといふことです。さういふことは割合少ない。といふのはその一方に、さつき言つたやうに、自然科學とか社會科學の立場からの解釋といふものが澤山受け入れられて、さういふ知識が非常に入つてゐる。自分の頭の中に知識としてさういふものが澤山あると、本當に自分が自分の中で「人間とは何か」と改めて問ひなほすことが却つて疎かになります。現代は一般にさういふふうな状況だと思ひます。

人間観といふことが現代の問題になるといふ時には、今言つたやうな主體的な意味で、各々人間が自分自身を

人間としてどう見てゐるか、どう受け取つてゐるのかといふ、さういふ主體的な意味での見るといふことが問題になります。その場合の見るといふところには、科學の立場と違つて、自分で自分を問題にするといふ面があるわけです。單に見るとか、知るとかでなしに、それが同時に生活の方針になる、方針を與へるといふことです。自分は如何に生きべきかといふ問題と結びついてゐるといふことです。ですから見るといふことだけでなくて、實際に行ふといふことも結びついてくる。しかもその場合、行ふといふことの根本に、自分を人間としてつくつて行くといふ人間形成といふことがあると思ひます。自分を人間としてどう見てゆくか、そして、その見てゆくことによつてどう行動を起して行くかといふことがいろいろあるわけですが、その見るとか、行ふといふことの根本には、やはり人間形成といふことがあると思ひます。これは、既に人間といふもの、人間があるといふことが、普通の意味のあるといふこととは非常に違ふといふことです。

人間があるといふのは、人間になるべきものとしてある。つまり人間が「ある」といふことは、「なる」といふことだといふことです。人間の存在 (to be) といふことは、本質的に to become といふことと離れてはいないといふことです。だから、例へば、石なら石がそこにあるといふふうな場合と、根本的に違ふところがあるのではないでせうか。人間といふ存在は、存在自身に課題として負はされてゐるやうなさういふ存在、つまり、存在自身が存在に課題的であるといふ意味をもつてゐるといふことです。人間といふものは、單にあるのではなくて、人間になる、といふことと本質的に結びついてゐるといふことでせう。

私はいろんな意味で、なるといふことは、やはりある、といふことの根本だと思ひます。しかし、なるといふことは、ただ自然になる、といふだけでなく、人間が自分の内から自分を人間にする、といふ意味を含んでゐると思ひます。だから、人間がある、といふことは、人間が自分自身を人間にする、といふ仕方である、といふことです。先に

人間形成と言ったのは、人間がある、といふときの人間の存在の一番本質的な在り方で、それはその存在が自分自身を存在にまで形成する人間であるといふことです。つまり、その存在はあるべきものとしてある (becoming) のであつて、目的であると同時に、また單なる目的だけでもない、人間の内からの働きといふことです。存在といふものには、自分自身をほんたうに存在にする働きがあり、それがあつたといふことの本質を成してゐるといふことです。さういふ意味で、人間形成といふことが、人間存在の根本的な形だといつてもいいと思ひます。さういふふう^に人間にする、といふところから言ふと、自由とか、課題的であるといふことは、存在が自分に取つて負ひ目であるといふことでせう。これはキェルケゴールやその他いろんな人からでてきてゐる言葉ですが、ドイツ語でシュルト (Schuld) といふ言葉があります。英語で言ふと debt、普通は「負ひ目」と譯してゐます。この「負ひ目」あるいは罪といふことが問題になつてくる根本は何かといふと、要するにその負ひ目を果せない、人間がほんたうに人間としてほんたうの在り方にならないといふことがあるわけです。それはその人自身の *being*、つまり、その人自身の責任、責めといふことです。ほんたうに人間になるべきものをならないで放つておけば、それはその人の *being* です。逆に言ふと、人間は人間になるやうに負はされてゐる、自分の存在が自分自身に負はされてゐるやうなそんな存在だといふことです。そこに何か責任とか、非常に廣い意味での罪といふ觀念の生じてくる一番基礎がある。 *to be* がそのまま *to do* だといふことはさういふ意味で言つてゐるのです。人間が人間としてあるといふことは、自分を人間にするといふ意味で、 *to make* あるいは *to be* といふ意味です。そんなふうなすゝかなすゝかといふこと、そこに自由といふことが根本にあるし、また絶えず自分のうちに果さなければならぬ負ひ目をもつてゐるといふことがある、そこに知、知るといふこと、即ち人間が自覺的であるといひますか、自分の存在といふことを自分で意識してゐる、知るものであるといふことがあるわけです。

人間の存在の根本は自己といふことです。I am (我あり)といふことです。人間があるといふことは外から見ることも勿論できます。それは科學のやうな立場で、人間とはかういふものだ、ああいふものだといふふうにしていろいろに人間の存在といふことを問題にすることができるといふことですが、さういふこともやはり重要な問題です。ことに現代では科學的な見方といふことが非常に重要な問題で、それを抜きにして現代の問題を考へることはできないと思ひます。しかし、今問題にしてゐるのは、さういふ立場から人間をどう考へるかといふことではなくて、I am といふことです。もう少し抽象的に言ふと、自己といふ存在です。一體その自己とか、我れとか、私といふ言葉で表はされてゐる自分といふ存在は、どういふ在り方かといふことです。人間といふものがいつも根本において、I am といふ言葉で言はれるやうな在り方をしてゐる、それはどういふ在り方かといふことです。主體性といふ言葉を使へば、主體性といふこととして成り立つてゐるといつてもいいと思ひます。主體性の根本は、やはり我れありといふ、一般的に言ふと、自己 (self) といふこととせう。近頃は self-being といふやうな言ひ方をするやうです。self-being とは一體どういふ在り方を意味してゐるのであらうかといふ問題です。

self といふことの中には、自分が自分を見る、知るといふことがあるのですから、自己意識といつていいかも知れません。人間は自分といふものを意識してゐる、自分といふものを知つてゐる存在だといふことです。

その場合、知るといふことは、やはりあるといふことと切り離せない。まづ先に何かがあつて、それを何かと知ると、そこに知るといふことがあるわけですが、その場合に、それを外側から知るといふのは科學の立場です。ところが、人間が自分自身を知るといふ場合にはさうではありません。まづ自分といふものがあつて、それを外から知るといふことではなくて、自分が自分を知るのでから、知られるものと知るものは同じものです。知ら

れるものが知るもので、知るものが知られるものだ、さういふ二つのものがアイデンティファイ (identity) されてゐる。つまり、self-identity 自「同一」といふことです。さういふ場合には、self-being と言ふわけです。

あるといふことはそのまま知る、といふことと切り離せない。だからその場合は、存在はいつも自覺的存在である。しかし、その自覺的存在といふのは、存在が自分自身を知るといふ存在自覺といふことと切り離せない、同じことを意味してゐる。ですから人間の場合、あるといふことと、知る、といふことは同じことだといふことです。言ひ換へると、人間といふ存在は、それ自身の存在を知るやうな存在としてある。初めからそれ自身の知を含んだ、それ自身を知る存在として存在してゐる。いはば存在が存在の中へ反射してゐる、自分自身の中に屈折してゐる、reflect してゐる、さういふ存在だといふことです。そして存在が存在自身の内へ向つて屈折してゐること、自分が自分の内へ折れ曲つてゐるといふこと、それが知る、といふことの根本です。

我々の存在が自分自身を知るといふ在り方をしてゐるといふこの在り方は、普通我々が存在と考へてゐるやうな存在の意味と根本的に違ふところがある。人間が人間として存在してゐるとはさういふことで、それがなければ人間といふことの存在はなくなる、人間といふ意味・本質的な存在といふことがはつきり握れないといふことになるのではないかと思ひます。要するに、人間はさういふ存在として、根本的にある、といふことと知る、といふことが人間の存在の中で一つになつてゐる、さういふ基礎が根本にあつて、そこから今度はいろんなものを知るといふ、さういふ知の働きがあるわけです。つまり、人間はものを知るといふことができる、知る力をもつた生物だといふことです。その何かを知るといふ根本に、自らを知るといふことがあり、しかもその自らを知るといふのは、何かを知るといふことと根本的に違ふといふことが重要です。何か対象を知るといふことではなく、そこにある、といふことと知る、といふことが一つです。人間がそこに人間としてゐる、といふそのこと自身の中に、

存在自身が知るものとして初めて考へられるといふわけです。

自らを知るといふことは何かを知るといふこととは違ふのですから、ほんたうは矛盾してゐる概念です。自らを知るといふと、知る自分がどこか別にある感じになるわけですが、實はさうではなく、自分と別にあるかのやうに言はれる自ら、は知る自分自身だといふことです。もし何かを知るといふことを知といふなら、人間の根本的なところでの知といふことは、つまり存在そのものが知だといふ意味の知は、それは知とは言へないといふことでせう。昔からいろんな宗教や哲學などで、「無知」とか、「無知の知」といふことが言はれ、非常に大きな意味をもつてゐます。あるいは愚とか一文不知とかいふことです。普通の人間の智慧と違つた、それでは擱めないやうなものとして愚かさといふことがでてくる。これは昔から佛教の中ではいろんなことが言はれてゐます。一番よく言はれるのは、見るといふことと結びついてゐる目です。たとへば「目は目を見ない」、同じことを言ひ表はすのは、「水は水を洗はない」、「火は火を焼かない」といふ言ひ方もします。火は大抵のものはみんな焼いてしまふが、しかし火自身は火を焼かない。水はいろんなものを濡らすが、水は水自身を濡らさない。同じやうに目は目を見ないといふことが言はれる。ところが、目は目を見ないといふことは、實は目が他のあらゆるものを見るといふことの根本になつてゐる。目が目を見たら、他のものは見えないわけです。目はただ開いてゐるといふことだけでいい。開いてゐることによつてほかのあらゆるものを見る。目が開いてゐるといふことは、それは何かを見るといふことではなくて、何かを見る根本の力になつてゐるといふことです。目は目を見ないといふことが非常に大切なことです。そこに目がある、目として、つまり見る力をもつたものとしてそこにあるといふことは、目の being といふことで、それが「目は目を見ない」といふことです。

人間といふものは、いろんなものを知ることのできるものとして存在してゐる。さういふ點で、昔から萬物の

靈長と言はれ、草木や、動物と違つてゐる。ほかのものとすっかり區別されるところはどこにあるかといふと、知る、といふことです。知るといふことの根本は、人間の存在といふことであつて、人間がそこにゐるといふことが既にそこに知といふことがあるといふことで、これは存在が目において開かれてゐると同じやうなところがあるといふことです。存在が存在自身を屈折してゐる、そこに存在そのものが知であるといふことがあつて、それが我々の自己とは何かといふ問題になり、そのことが同時に人間とは何かといふ問題になる。人間といふものは、ひとりひとりが自覺存在として存在してゐる、各々「目」と言へるやうな在り方で存在してゐるのですから、結局、自覺といふことが、人間とは何かといふ問題の根本になるわけです。

さういふ自覺といふことは、例へばかういふ場合を考へたらどうかと思ひます。假に生れてすぐ盲になつた人があつて、さういふ人が何年か後に、たまたま手術を受けて目が見えるやうになつたとする、さういふ時に、知るとか、わかる、といふことがある。例へば、これが机か、家かとわかる、見える、といふことがある。しかし、ただそれだけではなく、その見えることの驚きの一番根本に、見えるといふことはかういふことかといふことがわかる、といふことが含まれてゐると思ひます。目が開くといふことの中には、見る、といふ働きがそこでわかる、といふことがある。そこで驚くといふことは、目が覺める、といふことと一つに結びついてゐる。つまり、人間といふ存在の一番根本、人間があるといふ存在そのもののことですが、その中に根本的に知といふことが含まれてゐる。それはやはり、「目は目を見ない」といふことです。しかも、さういふ形で目がほんたうに見るものになつたと言へる。目が開いたといふことはさういふことだと思ひます。

見えないところから初めて見えるといふ状態が現はれた時には、やはり見えるといふことが驚きの中でわかる、といふことがある。根本的に言ふと、人間存在の根本にさういふことがあるのではないかと思ひます。我々は日

常いろいろな物を見てゐて、物が見えるといふことを少しも驚かないのですが、考へてみると、物が見えるといふことは非常に不思議なことだと言つてもいいところがあります。つまり、初めて盲の人が目を開いた時の驚きです。物を見るといふことの一番基礎に、見えるといふことはかういふことかといふことがわかる、といふことがある。物が見えるといふ働きそのものがそこにできてゐる。我々が物を見るといふ根本のところには、いつでもさういふふうに、見るといふ働きが働いてゐる、實は新しくいつも發動して現はれてゐるといふことがあると言へます。ただ我々は常に盲の人のやうには見てゐないものですから、慣れてしまつてゐるから驚かなくなつてゐます。しかし、ほんたうはさういふ見るといふ働きが、丁度盲の人と同じやうに、一瞬一瞬我々の内にも誰の内にもあり、それがあつたから物を見るといふことができる、といふところがあるのです。これは我々の人間としてあるといふこと、存在してゐることの根本ではないかと思ひます。全然盲といふことはないのでせうが、盲と同じやうなところが我々の存在の根本にはあり、そこに絶えず一瞬一瞬が新しくといふ人間としての存在があると言へるわけです。物を見てゐるといふその経験の基礎に、いつでも見るといふそのこと、その働きそのものの活動がある。見るといふ働きそのものが現成してゐる。絶えず新たに現成してゐる。丁度、盲の人が目を開くと同じやうに、新しく目を開くといふことが絶えずあるのだといふことです。しかし、我々はそれについて驚きを感じない。といふことはそれを忘れてゐるといふことだと思ひます。

そこで問題は、自分自身の本當の姿といふものを問ふ、自分とは何かといふことを問ふ。そして問うて歸るところは自分自身の本來の姿といふところ です。我れありといふ、自分が人間としてそこにゐるといふ、もともとさうであるやうなそこに歸るといふことだと思ひます。これが禪宗の言葉ですと、自分の本來の面目を見るときふことでせうか。自分の存在といふものはかういふ顔をしてゐる。かういふものだといふそれを見るときふこと